

## 会計情報

大鹿 智基 教授

Email: oshikat@waseda.jp

### 1) 担当教員の専門分野(研究領域)・現在の研究テーマ

会計情報のあるべき姿を明らかにするため、会計情報に対する株式市場の反応を実証的に分析している。特に、効率的市場が成立していることを前提とし、会計情報と企業価値との関連性(価値関連性)を観察することで、会計情報の意思決定有用性を確認する研究を進めている。さらに、企業のビジネスモデルの変化に伴って企業のステークホルダーが多岐に亘るようになり、企業価値の決定要因(バリュー・ドライバー)が人材や環境対策など、従来の会計情報では扱わない要素へシフトしつつあることを受けて、新たな会計情報の候補となる非財務情報の価値関連性に関する実証分析をおこなっている。

### 2) 指導方針

博士後期課程における研究活動を通じて、研究者として自立できる人材の育成を目指す。仮に、会計情報を用いた実証分析を主たる研究対象にするとしても、会計制度、管理会計システムなど、会計の他分野に対する理解は不可欠であるし、周辺分野の知識も必要である。そこで、中長期的に必要な研究能力の素養を身に付けるため、経済学、統計学、ファイナンスといった、会計情報や企業価値評価と密接に関連する周辺領域の素養を研究基盤として身に付けるとともに、視野の広い研究が可能となる問題意識を持てるよう指導する。自らの研究テーマを深く掘り下げつつも、幅広い知識や素養を持った研究者となるための十分な準備となる期間として位置付けている。

アウトプットしない研究者は研究者として認識されないので、自らが調査・分析した事項を、報告・論文の形で広くアウトプットできるよう、その機会を多く設定する。報告・投稿に対して返される指摘や批判を真摯に受け止め、よりよい研究の糧とするような、精神的にも成長した人材育成をサポートしたい。

### 3) 学生に対する要望・その他

博士後期課程の期間を、自立した研究者になるための最終準備段階であると自覚し、与えられた課題をこなすだけでなく、自ら問題意識を持ち、それを解決するという行動様式をとることを期待する。研究は、ときに孤独な営みであり、また、その到達点を自身で決定することも多いため、自らを律することは大切である。さらに、ゼミ内に閉じこもるのではなく、他ゼミ、他大学などと積極的に関わりを持ち、新たな知見を吸収することも不可欠である。それぞれの機会はこちらで用意するとしても、それを貪欲に活かそうとする意識を持った学生の入学を期待したい。